

アマゾン河のほとりで

これまで数多くの国で行われた開発調査に関わってきたが、私にとって成田から東に向かって飛び立ったのは初めての経験となった。今回は、アマゾン地域の南縁とセラードと呼ばれるやや乾燥した地域の中に位置するトカンチンス州北部地域の農牧業開発を目的とした開発調査であった。同地域の農業は畜産業主体であり、数千ヘクタールの土地を所有する少数の大農が肉牛生産を中心に牧場を経営している。一方、多くの貧しい小農にとっては荒地に火入れをして自給用の作物を生産し、跡地を牧草地に変えて行くという営農が一般的で、こうした焼畑農業が大きな環境問題にもなっている。従って、「すでに開拓された草地をいかに有効に活用し、残された森林をいかに保全するか」といったことが本調査の大きな課題であるといえる。

その課題を踏まえて、調査地域内に分布する草地を見て回っていると、ババスヤシやブリチヤシ等のヤシを中心とした自然植生が頻りに目に付いた。特に、ババスヤシは「21 世紀の熱帯植物資源」にも採り上げられており、その経済的潜在性は極めて高いと考えられている。種子は油分に富み、果実の殻も燃料として利用可能である。また、幹は家を建てる材料に、葉はゴザ、帽子、籠等の材料として使われる。現在、油脂としての利用価値は低下しているようであるが、植物体の芯部分を食するパルミット、あるいは活性炭としての需要は今後期待できそうである。同時に、植物学的には貴重種に指定されており保全の対象ともなっている。ところが、伐採地などでは他の樹木よりも旺盛な生育を示すために過繁茂となっている場合が多く、牧草地に生えそろうたババスヤシの幼木を見るとヤシの苗生産農場かと思う程である。つまり、この植物の適正な保全には、間引き等の管理が必要となっている。こうした地域に特有の植物資源をうまく利用して採取産業を活性化していくことができれば、貧農にとって現金収入の道となり、生計向上に役立つものと考えられる。ひいては、この貴重種を保全することにもなり、農業開発と環境保全の調和という課題の解決に繋がっていくものと思われる。「ババスヤシの向こうにトカンチンスの未来が見える」というキャッチフレーズも満更大げさなことでもでもないような気がする。

ババスヤシを有効に利用し地域住民の収入に結びつけるには、収穫、種子の取り出し、加工等に関わる数々の問題点を克服して行かなければならない。トカンチンス州にある大学の食品工学の部門では日系の研究者が中心となって、ババスヤシの種子からの油の抽出やその他の利用に関して地道な研究が続けられている。限られた予算の中であれこれ工夫している姿を見ると、こうした努力に対するちょっとした支援が、彼等の研究にとっては大きな弾みになるのではないかと強く感じた。

私にとってはじめてのラテンの国。アマゾン河に沈む夕日とサンバのリズム。サトウキビから作った酒“ピンガ”に酔いながら考えた。「今度ブラジルに来るときは、ババスヤシによる村おこしをやりたいな・・・」

(アマゾン河のほとりで:大沼)



牧草地に生えそろうたババスヤシの幼木



旺盛な生育を示すババスヤシ